

ぶっきょうつうしん い がっごう
仏教通信「変化する世界を生きる智慧」11月号

2025年10月28日の朝日新聞一面を飾った『首相「日米、新黄金時代を」』という見出しや、テレビニュースでクローズアップされたトランプ大統領と高市首相の「親密外交」「蜜月を再び」と表現される関係は、両政府トップの良好なスタートを象徴していました。しかし、仏教の視点から見ると、この幸福感に満ちた「親密」「蜜月」という関係こそが、しばしば執着（煩惱）の対象となります。その幸福な状態が強ければ強いほど、「この状態が永遠に続いてほしい」という渴愛や強い執着の心を生み出す土壤と考えるからです。

仏教では、「苦しみ」の根本原因はこの執着にあると説いています。幸福な状態に強くしがみつくと、その状態が失われた時の「苦しみ」を大きくする種をまいていることになります。ニュースで語られる「親密」「蜜月」も、一時的な状態であり、いつか必ず変化し、やがては終わるという「諸行無常」（この世のあらゆるものは絶えず変化し続け、永遠不滅なものはないという教え）の真理を示唆しています。政治の世界における「親密」な関係性も、友人、家族、同僚、隣人といった人々との関わり同様に感情や状況、そして利害の変化によってすぐに悪化することを自覚しておく必要があります。

この「親密」や「蜜月」に対し、私たちはどのように向き合えば良いのでしょうか。仏教的に捉えるのなら、「享受しつつも囚われず、変化に対応する」という生き方ではないでしょうか。この生き方の第一人者として、室町時代の僧侶、一休宗純禅師が挙げられます。権力や常識に囚われない自由な生き方を貫いた一休禅師は、「門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」という詩歌を残しました。この歌意は、世間が「めでたい」と浮かれる正月の門松も、実際には「死」へ一歩近づく標識であり、決してめでたいことばかりではないという無常の真実を突きつけています。一休禅師は、どんなに幸せな「親密」「蜜月」も、どんなに厳しい「孤独」「苦難」も、一時的な現象であり「大したことではない、大丈夫、なんとかなる」と捉えます。この「大したことではない、大丈夫」（全ての現象は移り変わり、永遠のものはないからこそ、執着して苦しむのはやめよう）という自由な境地こそが、幸福に溺れることも、失われたときに苦しむこともない、柔軟な冷静さを示しています。私たちが他者に求める「親密」「蜜月」な関係性も、一休禅師が示唆したように「めでたくもあり、めでたくもなし」という無常の真実の中にあります。

目の前の幸福な時間を享受しつつも、「この状態は必ず変化する」という真理を心の片隅に留めておくことこそが、関係が失われた時にあらわれる大きな苦しみに対応できる「智慧」につながります。政治の世界における「新黄金時代」であろうと、個人的な「親密」な関係であろうとも、その甘さに溺れたり、浮かれることなく、「囚われず、変化に対応する」という姿勢を保ち、常に自由な心で未来に向き合っていくことが大切です。合掌



11月の仏教行事は、報恩講は13日(木)、仏教朝礼は17日(月)、成道会は28日(金)に行われます。